

STAGE+を楽しむ(104)(HP 収載)

— 《コーヒー・カンタータ》 —

1. 始めに

前報(103)に引き続き、STAGE+のアーノンクールによる《コーヒー・カンタータ》の演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回は、アーノンクールによる《コーヒー・カンタータ》の演奏を選びました。

古楽の“復権者”、アーノンクールによる《コーヒー・カンタータ》

ペリーやシュライアーを迎えて

収録日: 1984年7月13日

オーストリア出身の指揮者、チェリスト、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者と幅広い顔を持つニコラウス・アーノンクールは、古楽の演奏において特別な存在感を放っていました。とりわけバッハの作品については「もしも我々がバッハの音楽に接することがなかったとしたら、我々は人間性を失ってしまうだろう」とまで語り、深く敬愛しています。本映像ではバッハの楽しさに溢れた傑作《コーヒー・カンタータ》が収められ、ジャネット・ペリーやペーター・シュライアーといった名歌手たちの美しい声と端正な表現を楽しむことができます。また、組曲第3番、ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲も必聴です。

ソリスト:

アリス・アーノンクール (ヴァイオリン)、ユルク・シェフトライン (オーボエ)、ペーター・シュライアー (テノール)、レオポルト・スタストニィ (フルート)、ヘルベルト・タヘツィ (チェンバロ)、ジャネット・ペリー (ソプラノ)、ロベルト・ホル (バス)

演奏:

コンツェントゥス・ムジクス・ウィーン

指揮:

ニコラウス・アーノンクール

曲目:

ヨハン・セバスティアン・バッハ

《おしゃべりはやめて、お静かに》 BWV 211 (コーヒー・カンタータ)

ロベルト・ホル(バス)

ジャネット・ペリー(ソプラノ)

ペーター・シュライアー(テノール)  
ヨハン・セバスティアン・バッハ  
オーボエとヴァイオリンのための協奏曲二短調 BWV 1060R  
ユルク・シェフトライン(オーボエ)  
アリス・アーノンクール(ヴァイオリン)  
ヨハン・セバスティアン・バッハ 管弦楽組曲第3番ニ長調 BWV 1068



### 3. 試聴の経過

前回から、スピーカーアキュライザーからのバイワイアリングケーブルにケーブルチューナーを装着し、ルーター→スイッチングハブ→PCの2本のLANケーブルにLANアキュライザーを使用しています。

さらに、今回からスイッチングハブに光城精工の仮想アース Crstal EpLを接続し、ルーターに自作の仮想アースを接続しています。

オールバッハのプログラムで、コーヒー・カンタータは、収録は1984年とかなり以前ですが、3人のソリストの歌唱は伸びのある声で、宮殿の一室のような環境でよく響いています。コンツェントゥス・ムジクス・ウィーンの前奏群は、少しエッジがたった音です。この曲は、演奏会で聴いたことがあり、懐かしく聴きました。

オーボエとヴァイオリンのための協奏曲二短調は、お馴染みの曲で、アーノンクールがチェロを担当しています。オーボエもヴァイオリンもクリアな音です。

管弦楽組曲第3番ニ長調は、これもお馴染みの曲でアーノンクールの切れのよい指揮で華やかな演奏ですが、もう少し音に湿度感が欲しいところです。



#### 4. まとめ

LAN アキュライザーと Crystal EpL の効果により、かなり以前の収録ですが、歯切れの良い演奏で、環境音もリアルですが、もう少し湿度感が欲しいところもあります。

以上